運営面から見たプラスチック成形加工学会の文化

佐藤 勲*

1. はじめに

プラスチック成形加工学会は2008年12月に創立20周年を迎える。この節目の時にあたり、これまでの本学会の活動状況を振り返り、これからの20年に向けての方向性を探ることを目的に、創立20周年記念誌が編集された。この中で本稿では、本学会の運営サイドからこの20年間の振り返ってみたい。ただし、創立から10年間の歩みについては、学会創立10周年記念号¹⁾にまとめられているので、これとの重複はできるだけ避けて、創立10～20年の学会運営を中心に述べることにしたい。

2. 会員数の変遷から見る本学会の歩み

学会の状況を振り返るに最もわかりやすいのが会員数の変遷であろう。図1のように、本学会の会員数はここ10年ほど、正会員1300名余、学生会員60名余、賛助会員170口程度を維持しつつも、微増の傾向を続けている。学会創立後数年間の「破竹」の会員増加に比すれば少し熱が冷めた状態であるともいえるが、この10年間は経済状況、特に製造業をめぐる経済状況もあって、工学系他学会でも会員数減少に歯止めがかからず苦勞していた時期でもあり、本学会はこの期間を何とか堅実にやり過ごすことができたといえよう。工学系の多くの学会が苦勞していた最大の要因は、厳しい経済状況の中、特に産業界に所属する会員が学会活動にメリットを感じられなくなって学会を離れることを止められなかったことにあるが、本学会は企業会員が比較的多いにもかかわらず、その要望に常に応え続ける姿勢を貫いてきたことがこうした結果につながったものと考えられる。本学会のこのような「雰囲気」は学会創立当初から綿々と受け継がれている「文化」の一つであり、今後この文化を良い意味で活かしていくことが望まれる。

3. 企画行事から見る本学会の歩み

本学会を特徴づける最大の因子は豊富な企画行事であろう。会員がそれぞれの持つものと求めるものを相互に忌憚なく交換しあえる場を持つことはこの学会の創立時の主意であり、その実現を念頭に20年間、様々な企画行事が実

図1 会員数の変遷

図2 大会参加者数と発表件数の変遷

施されてきた。

3.1 年次大会と秋季大会

本学会の看板行事である年次大会は、第14回国際高分子加工学会年次大会 (PPS-14) が横浜で開催された1998年度を除いて、学会創立当初の1989年度から5～6月に開催されている。年次大会の参加者数は、図2のように、学会創立当初は会員数よりも多い700～800名を集めたが、その後やや減少傾向を見せ、PPS-14の開催された1998年度が谷になっている。これは経済状況に加えて、学会創立当初の熱がやや冷めてきたこと、発表内容が学術によってきたことなどが考えられるが、その後順調に回復して再

* Satoh, Isao
東京工業大学大学院理工学研究科
東京都目黒区大岡山2-12-1 (〒152-8552)
2008.4.4 受理

び700～800名のラインに乗せ、全体的には漸増傾向を示している。この理由としては、ポスターセッションを開始して興味のある内容に対して発表者とじっくり議論ができる場を設けたことが大きい。発表件数で見ても、当初の10年間はほぼ120件程度であったものが、最近の10年では順調に伸びて200件程度、ピーク値では250件を超える発表が行われている。こうした活況の背景には、年次大会実行委員各位の熱意に加えて、やはり実際に困っている問題・興味のある問題に関する発表が数多く行われ、それに対して忌憚のない議論ができる雰囲気(文化というべきか)が受け継がれていることがあるといえよう。さらにこうした雰囲気を世代を超えて伝えていくために、2000年度の第11回年次大会から大会運営ボランティア(2004年からは運営支援委員)として主に企業に所属されている若手の方に年次大会運営の一端を担っていただいている。こうした人脈づくりも本学会の特色を発揮させるに効果をあげているものと思われる。

一方、1993年度から大阪を皮切りに開催された秋季大会(成形加工シンポジウム)は、参加者数・発表件数ともほぼ単調に増加しており、ここ数年では発表件数で年次大会を超える活況を呈している。秋季大会は当初、東京で開催される年次大会での熱気あふれる議論の場を東京以外の場でも持ちたいという動機から始められたものであったが、それぞれの開催地の魅力を引き出そうとするシンポジウム実行委員会各位の尽力もあり、参加者が秋季大会を「楽しもう」とする雰囲気が醸成されてきたことが見て取れる。これと同様に、年次大会でも秋季大会でも、参加者同士の懇親を深める場である懇親会の参加者が年々増えていると同時に、そこで消費される料理の量も急激に増加している(余談だが、学会創立当初は懇親会参加者数の7掛け分の料理でも余るといわれていたのに、最近では「食べ物の恨みは恐ろしい」との冗談が実行委員会メンバー間で引き継がれるようになっていく)。これも、学会を楽しもうとする会員が増えていることの表れであろう。

3.2 各種企画行事

年次大会・秋季大会と並んで、本学会の顔の一つである各種企画行事にも、この学会の文化が見て取れる。本学会では創立から2007年度までに100回を超える講演会(表2)、36回の技術交流会、13回の夏季セミナー等を開催している。これらのうち、講演会のテーマを一覧してみると、その対象とする成形技術や用途は様々であるが、実際の成形加工で困っている問題や新しい技術・動向を共有しようとする姿勢が貫かれていることがわかる。また、これらの企画行事には多くの参加者があることから、こうした姿勢が会員を中心に評価されているともいえる。このような企画は企画委員会各位が自ら聴きたいと思う内容を中心に立案されているが、その結果がこうした実際の問題に近いものとなるのも、企画委員会をはじめとする学会運営組織に産業界からのメンバーが数多く参画している本学会の特質・文化を如実に物語っている。この特質・文化こそがこの学会の財産であり、活力の根源である。

3.3 国際会議・国際企画

本学会の活動が活発化しそのプレゼンスが増すにつれ、当然のように国際的にも注目されるようになってきた。学

表1 年次大会と秋季大会の開催地

年度	年次大会会場	秋季大会開催地
1989	学士会館	—
1990		—
1991		—
1992		—
1993	中央大学 駿河台記念館	大阪
1994		京都
1995		福岡
1996		米沢
1997	日本青年館	金沢
1998	—	大阪
1999	大田区 産業プラザ	名古屋
2000		広島
2001		米沢
2002		北九州
2003		金沢
2004	タワーホール船堀	京都
2005		仙台
2006		岐阜
2007		山口
2008		福井(予定)

会創立後10年間では、年次大会・秋季大会における外国人研究者による特別講演や、1996年の第8回年次大会初日に開催された国際年次大会、あるいは1998年のPPS-14(横浜)の開催など、主に日本国内で開催した事業に国外の研究者が参加する形態の国際化が中心であった。これに対して、最近の10年間では、本学会自らが海外で主体的に運営する事業をもつようになったことが特徴的である。

2000年度には、黒崎会長(当時)、理事会を中心に、本学会の有する成形加工に関する知識と熱意をアジアの国々に広め、もって本学会をプラスチック成形加工分野のアジアにおける「ハブ」にしようという機運が高まった。これを受けて企画委員会では、国際化小委員会を設置し、2001年3月にタイ国において「日タイ成形加工ワークショップ」を開催する運びとなった。これが今日まで続くAsian Workshop on Polymer Processing(AWPP)シリーズの原点であり、表3のように、これまでにタイ、シンガポール、中国、台湾、タイ(2回目)、大韓民国でワークショップが開催され、本学会の国際的プレゼンスを向上させるとともに、会員の国際的人脈づくりに大いに寄与してきた。2008年にはこれらの活動を総括する意味で開催地を日本に戻して、Asian Workshop on Polymer Processing in Japan 2008が開催される予定である。この活動に呼応するように、2004年には末松会長(当時)の発案で海外の学会と協調して学術交流を進めることとし、タイ国「Polymer Society」、中国「中国塑料加工工業協会」と交流協定を締結するに至っている。

さらに、最近10年間においても、本学会として幾つかの国際会議を共催し、国際的なプレゼンスを高めた。その最大のものは2006年7月に山形で開催された第22回国際

表2 これまでの講演会タイトル一覧

年度	回数	タイトル	年度	回数	タイトル
1989	第1回	射出成形の高精密化をどう進めるか	2000	第51回	次世代光ディスクへの新たな成形と検査・計測
	第2回	プラスチックの成形加工における最新の計測技術		第52回	第2弾「発泡成形」東京開催
	第3回	プラスチック複合材料の成形法の新展開		第53回	精密・多機能プラスチックの医療への応用
1990	第4回	プラスチック混練の理論と実際		第54回	第3弾「続・発泡成形」
	第5回	ブロー成形加工技術はどう変わろうとしているのか？		第55回	パイプ成形技術と新しい用途展開
	第6回	自動車のプラスチック成形技術の動向		第56回	高付加価値を生む金型技術
1991	第7回	成形加工における高次構造の制御		第57回	新春講演会－新世紀の幕開け・2001年－
	第8回	プラスチック複合材料の新展開		第58回	二次加工としての溶着技術
	第9回	家電・エレクトロニクスとプラスチック材料・成形加工		第59回	製品開発に必須な材料計測技術
1992	第10回	射出成形は、今、どうかかわろうとしているか？－新しい側面をもつ射出成形技術の潮流－	2001	第60回	ナノコンポジット材料の最新動向
	第11回	プラスチック製品の高機能化をめざした成形加工工程中及び後工程の進歩		第61回	ITを支える高機能複合材料
	第12回	プラスチックリサイクリングの最先端セミナー		第62回	ラピッドプロトタイピング（RPT）は開発効率化の切り札となるか
1993	第13回	'93プラスチック・複合材料の新展開		第63回	熱可塑性エラストマーを使いこなそう
	第14回	注目されるプラスチック加工技術とその問題点		第64回	新春講演会－21世紀を勝ち抜くための技術戦略－
	第15回	成形シミュレーションに何処まで期待できるか		第65回	超臨界流体を利用した成形加工技術
1994	第16回	プラスチック成形プロセスの未知を覗く		第66回	生分解性プラスチックの現状とその問題点を探る
	第17回	成形不良解決－今、成形現場では何がおこっているか！		第67回	プラスチック成形加工 CAE の進化がはじまる
	第18回	中空・軽量化成形技術はどこまで実用化が広がるか？	2002	第68回	次世代高機能性フィルム
1995	第19回	今、なぜ伸長粘度が注目されているのか？		第69回	高分子固体型燃料電池用材料と最新成形加工技術
	第20回	包装システムと加工技術の現状と未来－包装システムはどう変わろうとしているか－		第70回	プラスチック成形品の外観、表面品質
	第21回	成形加工と熱－基本に立ち戻って考えよう	2003	第71回	マイクロ・ナノ成形加工の最前線
1996	第22回	今、成形製品の表面、外観はどこまで改良できるか!!－成形現場の表面外観不良から改良成形技術まで		第72回	可視化による成形現象の解析
	第23回	新成形加工技術と金型の動向		第73回	温度計測と伝熱制御
	第24回	今、高性能汎用樹脂はどう変わろうとしているのか		第74回	こんなに実用化されているグリーンブラ
1997	第25回	熱成形の高品質化技術の最新動向		第75回	複合材料－基礎から応用－
	第26回	流す・形にする・固める		第76回	レーザ応用技術で進化する成形加工
	第27回	一体成形・複合成形		第77回	電場・磁場・振動を利用した先進成形加工
1998	第28回	流す・形にする・固める		第78回	家電・電子機器等工業製品のリサイクル技術
	第29回	ここまで来た、どこへ行くプラスチックリサイクリング	2004	第79回	バイオ由来資源材料の現状と将来
	第30回	不良判別と計測制御技術		第80回	ものづくりから見た燃料電池（1）
1999	第31回	新素材の成形加工と構造制御		第81回	CAEと材料データベース
	第32回	多品種少量生産への取り組み－小ロット生産はまかしとき－		第82回	液晶ディスプレイ用光学材料・光学部品
	第33回	成形加工テキストシリーズ講演会 第2弾		第83回	ものづくりから見た燃料電池（2）
2000	第34回	最新の射出成形 CAE 技術の動向と将来－将来のベンチマークテストに向けて－		第84回	表面を彩る技術－美しく、機能的な成形品を目指して－
	第35回	摩擦と摩耗－あなたの疑問に答えます。そのメカニズムと対策－	2005	第85回	超臨界流体利用技術の最前線
	第36回	成形加工テキストシリーズ講演会		第86回	フラットパネルディスプレイ用光学材料・光学部品
2001	第37回	もっと早く、より早く－射出成形におけるラピッドプロダクション技術－		第87回	ここまで来た、マイクロ・ナノ成形加工
	第38回	新素材の成形加工の可能性を探る		第88回	バイオマス由来資源材料の現状と将来（2）
	第39回	高付加価値、低コスト、高生産性の内外技術		第89回	プラスチック製品設計－基礎から応用－
2002	第40回	製品設計における最新技術と将来動向		第90回	ずばり使えるプラスチックのレーザ－溶着（実演有）
	第41回	環境対策！本格化の兆し	2006	第91回	アジア・プラスチック成形ワークショップ 2005・イン・台湾 報告会
	第42回	新たな可能性を秘めた成形加工法を探る		第92回	押出機による溶融混練
2003	第43回	成形加工の基礎理論と最新の計測技術		第93回	燃料電池を支える要素技術を考える－高圧圧力容器の現状－
	第44回	メタロセン系ポリマーの現状と将来		第94回	フラットパネルディスプレイ用材料・成形・加工
	第45回	プラスチック製品のトラブル解決		第95回	バイオベースポリマーの現状と将来
2004	第46回	プラスチックフィルム・繊維の最新技術と将来		第96回	射出成形におけるヒケ、ソリ対策技術
	第47回	3次元射出成形 CAE	2007	第97回	“超”を極める東大横井研究室をのぞいて見よう
	第48回	新春講演会－21世紀への扉・2000年－		第98回	どうなる、どうなの、マイクロ・ナノ成形
2005	第49回	発泡成形－発泡成形は新時代を迎えるか－		第99回	最先端の二次電池・キャパシタの開発動向
	第50回	成形加工テキストシリーズ講演会－第6巻－		第100回	自動車構造部材の樹脂化
				第101回	フラットパネル用素材・フィルム・成形加工・機能化技術
				第102回	“超臨界”を自在に操る京大・大嶋研究室をのぞいて見よう

表3 AWPPの変遷

年度	英文名称
2001	Asian Workshop on Polymer Processing in Thailand 2001
2002	Asian Workshop on Polymer Processing in Singapore 2002
2004	Asian Workshop on Polymer Processing in China 2004
2005	Asian Workshop on Polymer Processing in Taiwan 2005
2006	Asian Workshop on Polymer Processing in Thailand 2006
2007	Asian Workshop on Polymer Processing in Korea 2007
2008	Asian Workshop on Polymer Processing in Japan 2008 (予定)

高分子加工学会年次大会 (PPS-22) であろう。本学会が共催して国内で開催される PPS 年次大会としては 2 回目にあたるが、前回の PPS-14 (横浜) ではその運営に注力するため、当該年度の本学会年次大会の開催を見送らざるを得なかった。これに対して PPS-22 では、本学会年次大会と PPS 年次大会との間にできるだけ時間を空けるよう配慮した (といっても 1 ヶ月ほど) もの、本学会の年次大会を通常通り開催した上で、さらに 570 名を集めて PPS-22 が開催でき、しかも年次大会の参加者数・講演数にほとんど影響が及ばなかった。これは本学会の運営能力と会員の有する学術成果の懐の深さの双方がこの 10 年間に格段に進歩したことを示唆しているものと考えられる。

4. 出版物にみる本学会の歩み

4.1 会誌「成形加工」

各種企画行事とともに学会の活動状況を映す鏡の一つが会誌であろう。本学会誌「成形加工」は、1989 年 4 月に創刊され、1991 年 4 月から月刊化されて以降 (それまでは隔月刊)、今日まで毎月、会員に送付され続けている。本学会に相当する規模の学会で月刊の学会誌を有しているところはきわめて少なく、この点からも本学会が会誌を通じた会員間の情報交換を重視してきたことがわかる。このような会誌刊行が可能となった背景には、シグマ出版 (学会創立当初から 1999 年 6 月号まで)、ニッセイエブロ (1999 年 7 月号から) の編集作業上のサポートがあったことが大きい。

第 1 巻から今日に至るまでの各巻 (1~12 月) の総ページ数 (図 3) を見ると、学会創立当初からの 10 年間には急激な増加を見せている。特に第 5 巻 (1993 年)、第 6 巻 (1994 年) はそれぞれ射出成形と押出・ブロー成形の論文・技術報告特集が組まれたこともあり、ページ数が急激に増加した。その後も豊富な解説記事や論文によって総ページ数が増える傾向が見えたことから、公文書等の A4 判化の流れに合わせて、第 12 巻 (2000 年) から会誌を A4 判とし、総ページ数を削減したが、その後も今日に至るまでページ数は微増の傾向を示し続けている。

一方、学術団体としては、論文として発表される学術研究も重要である。学会誌に掲載される論文数はここ 10 年間では年間 24~37 編で推移している。前述の年次大会・秋季大会における発表件数の増加に比べて論文数が増加しない傾向は、この 10 年間の理事会や会誌・論文編集委員会で常に議論になってきたことである。このことは単に「善し悪し」ではなく、製造技術に立脚する本学会の特質の一

図3 会誌「成形加工」の総ページ数と論文数の変遷

つであるかもしれない。論文として研究成果を自由に開示できるのは大学・公的研究機関に所属する会員に限られるかもしれないが、学術団体としてのアクティビティをより高めるためには論文数とそのクオリティの向上が重要であることは間違いない。この状況を打破するため、会誌・論文編集委員会では本学会の学術的アクティビティを広く認知してもらうための施策をとってきた。その一つが 2005 年 4 月から始められた、Polymer Processing Society (PPS) との協定に基づく成形加工誌と International Polymer Processing (IPP) 誌との間での論文英文概要の相互掲載である。また、現在、論文を含めた会誌の電子出版化が検討されはじめている。これらによって広く一般から本学会に対する認知が高まり、本学会のプレゼンスがより高まることを期待したい。

4.2 テキストシリーズとその他の出版物

様々な分野の知識を統合して成立するプラスチック成形加工の分野において、それぞれの分野の研究者や技術者が意見交換をする機会が増えるにつれ、「プラスチック成形加工学」を学問として体系付け、そのための標準的な教科書を編集したいとの意向が大きくなってきた。これを受けて、1994 年から、法人化達成記念行事の一環として、全 6 巻からなるテキストシリーズ刊行事業がスタートし、1996 年に第 1 巻「流す・形にする・固める」が刊行された。それ以降、同シリーズは順次刊行され、現時点で第 1~3 巻、第 6 巻が上市され、第 4・5 巻が刊行予定である。

一方、会誌「成形加工」の記事の一つである「講座」か

図4 研究委員会・専門委員会の変遷

らも専門書が生まれている。「講座」はプラスチック成形加工に関わる特定の分野について、その基礎から応用までを連載で解説する記事であるが、これをまとめて専門書としてほしいとの要望があった。このような要望を受けて、「プラスチック成形品の高次構造解析入門」が日刊工業新聞社から2006年2月に、「図解 プラスチック成形材料」が工業調査会から2006年5月に刊行されている。

5. 研究組織：研究委員会と専門委員会

プラスチック成形加工学および境界領域にある技術分野に関する研究の健全な発達と会員に対する成果の還元を期するために、重要な課題について継続的に調査・研究することを目的として、会員から構成される研究組織である研究委員会（後に専門委員会）が1989年3月から設置されている。これらの研究委員会・専門委員会の運営は委員長の方針により様々な形態をとっているが、いずれも共通して特定のテーマに関する討議を、年次大会や秋季大会よりインフォーマルな雰囲気、なおかつ講演会よりフランクに行えることを特徴としている。

図4に示すように、専門委員会は当初、4委員会で発足したが、1992年には7委員会にまで増加し、1997～1998年にいったん2委員会まで漸減したものの、1998年に新たに学会の活性化を図り基盤強化を目的とする専門委員会規定を策定した結果、1999年には5つの専門委員会が発足してその活動を開始した。現在は5つの専門委員会がそれぞれの分野に関する調査研究を実施するとともに、参加会員間の知識的人脈づくりに寄与している。

学術面・技術面の「腹を割った」議論は、企業間の垣根や産官学間の意識の違いなどから難しい場合が多いが、こうした活動が円滑かつ活発に行い得るところが会員間のバリエーションが低い本学会の特質の一つであろう。

6. 学会賞：論文賞と青木固技術賞

1990年度から、学会誌「成形加工」に掲載され公表された研究論文を対象として最も優秀なものに対し研究の奨励と学術の発展を促進する目的でプラスチック成形加工学会論文賞（原則毎年2件）が、また、プラスチック成形加工技術において創造的業績をあげた研究者・技術者に対してその精進と努力に報い将来のさらなる発展を期待して

「青木固」技術賞（原則毎年3件）が贈られている。2006年度（贈賞は2007年度）までの贈賞数は、表4のように、論文賞33件、技術賞50件にのぼり、これらの受賞題目を眺めると、その時代の最先端の研究成果や技術開発の動向を見て取ることができる。

なお、学会賞の名称になっている青木固氏は日精樹脂工業株式会社の創始者で、射出成形機・延伸ブロー成形機など多くのプラスチック成形機械の発明と開発に世界的な業績を残された。技術賞の創設にあたっては、同氏の業績を讃えるため、名称を「青木固」技術賞とするとともに、日精樹脂工業株式会社の継続的なご支援をお願いした。今日まで学会賞の専攻・運営が円滑に行われている背景には、同社のご理解とご厚意によるところが大きいことを付記させていただく。

7. 学会運営と事務局

本学会は、1994年10月に、学会創立後約6年という異例の早さで社団法人化を達成した。その後も順調に学会としてのプレゼンスを維持し増進している。ここでは、この歩みを学会運営と事務局の側面から見てみる。

7.1 理事会、各種委員会

学会の運営を担当する理事会は、会長・副会長・理事から構成され、その運営を監事が監査する形態となっている。表5に各期の理事会構成を示す。法人化直前（第3期：1992～1993年度）は会長・副会長を含む理事数が30名ほどであったが、法人化に伴い定款が変更され、会長・副会長を含む理事は20名以内となると同時に、学会運営の安定化のため、従来の庶務・企画・編集担当の副会長に加えて、財務担当の副会長が置かれることとなった。また、第7期からは監事を従来の2名から3名に増員している。これらの理事会メンバーは、「働く理事会」を標榜して、学会運営だけでなく、各種企画行事や年次大会・秋季大会等でも献身的な働きをしてきた。これもこの学会の良き伝統であり文化であるといえる。

理事会のもとにはそれぞれの所轄事項を企画運営する各種委員会が置かれている。委員会としては編集委員会・企画委員会・財務委員会・将来問題検討委員会等があり、それぞれ担当副会長または担当理事が中心に活動している。また、緊急に検討すべき事項が発生した場合には、アドホック

表 4 (a) 論文賞受賞者一覧

回数	年度	受賞者	受賞者所属	受賞題目	回数	年度	受賞者	受賞者所属	受賞題目			
第 1 回	1990	1	西村寛之 穴戸 透 仲倉正博 柴野 博 北尾幸市	大阪ガス㈱ 大阪ガス㈱ 大阪ガス㈱ 昭和電工㈱ 日本鋼管㈱	第 9 回	1998	1	Louis Tredoux 佐藤 勲 黒崎晏夫	東京工業大学 東京工業大学 電気通信大学	射出成形品上のフローマーク発現機構の伝熱工学的検討		
			2	鞠谷雄士 河原 豊 松居隆之 高久 明 清水二郎			東京工業大学 東京工業大学 東京工業大学 東京工業大学 静岡工業工専	2	元田武彦 石原 誠	積水化学工業㈱ 積水化学工業㈱	二軸押出機内の樹脂挙動解明－溶融・吐出ステップにおける二次元樹脂流動モデルと解算－	
		2	黒崎晏夫 龍腰健太郎 佐藤 勲	東京工業大学 東京工業大学 東京工業大学			第 10 回	1999	1	加藤和典 鄭 湧皓 大竹尚登	東京工業大学 東京工業大学 東京工業大学	セラミックス成形助剤混合材料のキャピラリー内面のすべりと粘度測定法に関する研究
			2	御林 毅 茂谷 茂 林 隆博 吉田博之					鐘淵化学工業㈱ 鐘淵化学工業㈱ 鐘淵化学工業㈱ 鐘淵化学工業㈱	2	辻村勇夫 村山 徹 善木智義 池田順一 石田 守 外岡弘勝	鐘淵化学工業㈱ 鐘淵化学工業㈱ 鐘淵化学工業㈱ 鐘淵化学工業㈱ 鐘淵化学工業㈱ 広島大学
第 2 回	1991	1	黒崎晏夫 龍腰健太郎 佐藤 勲	東京工業大学 東京工業大学 東京工業大学	第 11 回	2000			1	鎌田 悟 工藤 素 守時 一 小山清人	秋田県工業技術センター 秋田県工業技術センター 秋田大学 山形大学	射出圧縮成形による結晶化制御に関する研究 第 2 報 ポリエチレンテレフタレートの結晶化制御
			2	野々村千里 山田敏郎					東洋紡績㈱ 東洋紡績㈱	2	松岡孝明 山本 智 高原 稔	㈱豊田中央研究所 ㈱豊田中央研究所 ㈱豊田中央研究所
		2	松尾達樹 梶原稔尚 中野祥生 船津和守 二之宮慎一	東洋紡績㈱ 九州大学 九州大学 九州大学 ㈱日本製鋼所			第 12 回	2001	1	佐伯準一 吉田 勇	㈱日立製作所 ㈱日立製作所	半導体封止用エポキシ樹脂の発熱挙動の解析 第 1 報 発熱モデルの構築
			2	西脇信彦 崔 愛玲 今野政昭 堀 三計					東京農工大学 東京農工大学 東京農工大学 東京農工大学	2	永田武史 大嶋正裕 谷垣昌敬	京都大学大学院 京都大学大学院 京都大学大学院
第 3 回	1992	1	焼本数利 前川善一郎 濱田泰以 酒井忠基	㈱日本製鋼所 京都工芸繊維大学 京都工芸繊維大学 ㈱日本製鋼所	第 13 回	2002			1	木原伸一 京田勇樹 孝忠智康 船津和守	京都大学大学院 スズキ㈱ トヨタ自動車㈱ 九州大学大学院	高分子ブレンドの流動を伴う相分離過程の数値シミュレーションの試み
			2	伊藤浩志 堤 康裕 南川慶二 多田和美 小山清人					鶴岡工業高専 山形大学 山形大学 ㈱プラメディアリサーチ 山形大学	2	石原英昭 後藤真澄 渡原 法 奥平 正	京都工芸繊維大学 東洋紡績㈱ 東洋紡績㈱ 東洋紡績㈱
		2	今村伸二 金田 勉 九島行正 大田 彰 戸来稔雄 小山清人	新日本製鐵㈱ 新日本製鐵㈱ 新日本製鐵㈱ 新日本製鐵㈱ 新日本製鐵㈱ 山形大学			第 14 回	2003	1	戴 亜輝 折原勝男 倉本憲幸 野村 隆	山形大学大学院 山形大学 山形大学 福島県ハイテクプラザ	ポリアニリンの組成比を傾斜化したエンブラの自己組織化的成形とその導電性
			2	村田泰彦 横井秀俊 長谷元弘 原田浩次					東京大学 東京大学 ファナック㈱ 積水化学工業㈱	2	大槻安彦 金井俊孝 瀧健太郎 大嶋正裕	出光石油化学㈱ 出光石油化学㈱ 京都大学大学院 京都大学大学院
第 4 回	1993	1	松尾達樹 梶原稔尚 中野祥生 船津和守 二之宮慎一	東洋紡績㈱ 九州大学 九州大学 九州大学 ㈱日本製鋼所	第 15 回	2004			1	佐藤善之 近常哲也 林 一成 滝島繁樹 舩岡弘勝 山本博一 高杉雅信	広島大学 広島大学 広島大学 広島大学 西川ゴム工業㈱ 西川ゴム工業㈱	超臨界流体による poly (ethylene terephthalate) のマイクロセルラープラスチック製造に関する基礎的研究
			2	伊藤浩志 川村 孝 滝本淳一 小山清人					鶴岡工業高専 山形大学 山形大学 山形大学	2	城本征治 小山清人	住友化学㈱ 山形大学
		2	今西秀明 内藤隆之 梅原和夫	愛知県工技センター 豊和繊維工業㈱ 愛知工技センター			第 16 回	2005	1	高瀬博文 古川真基 岸 肇 村上 惇	タキロン㈱ 兵庫県立大学 兵庫県立大学 兵庫県立大学	二軸押出機によるポリマー中のカーボンナノチューブの分散 II
			2	元田武彦 石原 誠					積水化学工業㈱ 積水化学工業㈱	2	河野 務 佐伯準一 荒木邦成 井岡 崇 松岡信一	㈱日立製作所 ㈱日立製作所 日立ホーム&ライフソリューション㈱ 日立ホーム&ライフソリューション㈱ 富山県立大学
第 5 回	1994	1	伊藤浩志 堤 康裕 南川慶二 多田和美 小山清人	鶴岡工業高専 山形大学 山形大学 ㈱プラメディアリサーチ 山形大学	第 17 回	2006			1	末次義幸 佐藤 淳	出光興産㈱ 出光興産㈱	超音波による溶融ポリマー中の微細粒子モデル凝集体の分散挙動
			2	今西秀明 内藤隆之 梅原和夫					愛知県工技センター 豊和繊維工業㈱ 愛知工技センター	2	川村宗弘 守田 了 田中 稔 橋 輝夫	山口県工技センター 山口大学 山口大学 宇部興産㈱
第 6 回	1995	1	村田泰彦 横井秀俊 長谷元弘 原田浩次	東京大学 東京大学 ファナック㈱ 積水化学工業㈱	第 18 回	2007	1	末次義幸 佐藤 淳	出光興産㈱ 出光興産㈱	超音波による溶融ポリマー中の微細粒子モデル凝集体の分散挙動		
			2	伊藤浩志 川村 孝 滝本淳一 小山清人							鶴岡工業高専 山形大学 山形大学 山形大学	
第 7 回	1996	1	今西秀明 内藤隆之 梅原和夫	愛知県工技センター 豊和繊維工業㈱ 愛知工技センター	第 19 回	2008	1	末次義幸 佐藤 淳	出光興産㈱ 出光興産㈱	超音波による溶融ポリマー中の微細粒子モデル凝集体の分散挙動		
			2	元田武彦 石原 誠							積水化学工業㈱ 積水化学工業㈱	
第 8 回	1997	1	片岡 紘 梅井勇雄 加藤敏生	旭化成工業㈱ 旭化成工業㈱ 旭化成工業㈱	第 20 回	2009	1	末次義幸 佐藤 淳	出光興産㈱ 出光興産㈱	超音波による溶融ポリマー中の微細粒子モデル凝集体の分散挙動		
			2	川村宗弘 守田 了 田中 稔 橋 輝夫							山口県工技センター 山口大学 山口大学 宇部興産㈱	

クな委員会が設置されてきた。さらに、年次大会・秋季大会の企画・運営に対しては、それぞれの大会ごとに実行委員会が構成されている。なお、編集委員会は当初、会誌の編集を行う編集委員会と論文の校閲を担当する校閲委員会が一つの委員会として双方の役割を果たしてきたが、論文数増加への対応と会誌編集と論文校閲の独立性確保のため、1994 年 12 月から会誌編集委員会と論文編集委員会が独立してそれぞれを所轄するようになっている。

7.2 ホームページ

学会創立以来、企画行事の案内や会員へのアナウンスメントは会誌の会告ページを通して行われてきたが、発行コストに直結する会誌ページ数の制限にとらわれることなく詳細なアナウンスが行えること、案内の即時性と対象の広範さ、そして何よりも時流の要求から、学会としてホームページをもち、これを通してアナウンスを行うべきとの議論が理事会でなされ、1998 年 12 月に「ホームページ WG」を設置して内容や運用方法について検討を開始した。その

表 4 (b) 「青木固」技術賞受賞者一覧

回数	年度	受賞者	受賞者所属	受賞題目	回数	年度	受賞者	受賞者所属	受賞題目	
第 1 回	1990	1	梶井捷平 原 孚尚 松本正人 白井信裕	住友化学工業㈱ 住友化学工業㈱ 住友化学工業㈱ 住友化学工業㈱	第 7 回	1996	4	山部 昌 寺田耕輔 松尾隆一 鎌分敏之 磯部博樹	日産自動車㈱ 日産自動車㈱ 日産自動車㈱ 日産自動車㈱ 日産自動車㈱	新型車用樹脂製ガソリントank 開発へのブロー成形シミュレ ーションの適用
		2	森 直重 藤原力司 長瀬高志 小林一夫	㈱トヨタ自動車 ㈱トヨタ自動車 ㈱トヨタ自動車 ㈱トヨタ自動車			1	田中 太 中野 亮 田中豊喜 大野勝也 上杉忠敏	東レ㈱ 東レ㈱ 東レ㈱ 東レ㈱ 東レ㈱	ブロー成形CAE 技術開発と実 用システム化
		3	横田 明 西沢 清 後藤秀昭	㈱小松製作所 ㈱小松製作所 ㈱小松製作所			2	泉田敏明 水間精一 島岡悟郎 神崎文彰 田原久志	三菱エンジニアリングプラスチック㈱ 三菱エンジニアリングプラスチック㈱ 三菱エンジニアリングプラスチック㈱ 三菱エンジニアリングプラスチック㈱ 三菱エンジニアリングプラスチック㈱	CFI プロセス（ハードコート PC シートによる一体化成形） 技術の開発
		4	酒井忠基 水口英樹 織田典聖 石堂隆雄 花田誠吾	㈱日本製鋼所 ㈱日本製鋼所 ㈱日本製鋼所 ㈱日本製鋼所 ㈱日本製鋼所			3	館山弘文 加藤 毅 鈴木淳広 渡辺広三	東北ムネカタ㈱ 東北ムネカタ㈱ 東北ムネカタ㈱ 東北ムネカタ㈱	低圧成形技術と応用技術
第 2 回	1991	1	岩瀬英裕 杉村宣雄 小嶋政夫	東芝ケミカル㈱ 東芝ケミカル㈱ ㈱ケミカルエンジニアリング	第 8 回	1997	1	王 寧和 橋本憲明 水口英樹 中村和之	㈱日本製鋼所 ㈱日本製鋼所 ㈱日本製鋼所 ㈱日本製鋼所	脱揮押出理論に基づいた高性能 二軸スクリュ脱揮押出機の開発
		2	高山和利 宮入一喜 保科昌志	日精樹脂工業㈱ 日精樹脂工業㈱ 日精樹脂工業㈱			2	濱野明人 熊野勝文 伊藤勝也 多賀 敦 松井武司	東洋紡績㈱ 東洋紡績㈱ 東洋紡績㈱ 東洋紡績㈱ 東洋紡績㈱	空洞含有ポリエステル系フィル ムの開発
		3	小林俊雄 金子勝利 橋本 隆 金川 豊	三井石油化学工業㈱ 三井石油化学工業㈱ サンメディカル㈱ ハイシート工業㈱			3	馬場文明 原 宏造 村上 治	三菱電機㈱ 三菱電機㈱ 三菱電機㈱	繊維強化液晶ポリマーの高速射 出成形技術とスピーカー振動版 への適用
第 3 回	1992	1	服部建一 堀越真木 飯田勇夫 渡辺三男	旭化成工業㈱ 旭化成工業㈱ RP 東プラ㈱ RP 東プラ㈱	第 9 回	1998	1	小瀬古久秋 畠山寿治 渡部 順 沢田清孝 平野彰士	㈱リコー ㈱リコー ㈱リコー ㈱リコー ㈱リコー	高精度プラスチック光学部品の 再溶融成形技術
		2	井川正治 小林信夫 村山公正 水野基弘	トヨタ自動車㈱ トヨタ自動車㈱ トヨタ自動車㈱ トヨタ自動車㈱			2	向井 浩 川島大一郎 水谷治靖 小泉順二 真辺晴高	豊田合成㈱ 豊田合成㈱ 豊田合成㈱ 豊田合成㈱ 豊田合成㈱	材料着色とサンドイッチ成形に よる無塗装化技術
		3	山田洋輔 大野嘉孝 辻倉一成 益谷敏夫	㈱日本製鋼所 ㈱日本製鋼所 ㈱日本製鋼所 ㈱日本製鋼所			3	湯本哲男 大村慎吾 明田智行	三共化成㈱ ㈱東亜電化 ポリプラスチック㈱	2 回成形法による LCP 製 3 次 元成形回路部品の実用化
第 4 回	1993	1	植田和幸 井形 正 森本高生	松下電工㈱ 松下電工㈱ 松下電工㈱	第 10 回	1999	1	加藤信行 濱田和久 竹内公生 深堀徳高 松野建治	東洋製罐グループ総合研究所 東洋製罐グループ総合研究所 東洋製罐グループ総合研究所 東洋製罐グループ総合研究所 東洋製罐㈱	ワンピース耐熱圧 PET ボトル の 2 段階ブロー成形技術
		2	佐伯準一 杉野和宏 安原敏浩 西 邦彦 金田愛三	㈱日立製作所 ㈱日立製作所 ㈱日立製作所 ㈱日立製作所 日立化成工業			2	宮尾哲也 脇 孝範 貞安啓志 長谷川伸二 三島滋治	大協㈱ 大協㈱ 大協㈱ 大協㈱ 大協㈱	ダイロタリー方式の中空射出 成形と熱線溶着による等長イン テークマニホールドの樹脂化技 術
		3	中村 誠 中村伸之 甲田紀泰 青木英実 荒井 健	日精樹脂工業㈱ 日精樹脂工業㈱ 日精樹脂工業㈱ 日精樹脂工業㈱ 日精樹脂工業㈱			3	岡原悦雄 荒井俊夫 小林和明 岡本昭男 清水富彦	宇部興産㈱ 宇部興産㈱ 宇部興産㈱ 宇部興産㈱ 宇部興産㈱	精密な型開き制御機構を有する 射出成形機による高品位表面加 飾製品の製造技術
第 5 回	1994	1	竹中雅三 谷本健一 山尾睦矩 今尾憲司 大平秀美	ユニチカ㈱ ユニチカ㈱ ユニチカ㈱ ユニチカ㈱ ユニチカ㈱	第 11 回	2000	1	井上正隆 高本裕光	広島プラスチック㈱ 広島プラスチック㈱	膨張者を利用した複合材料の成 形方法
		2	阿部知和 田中隆義 斉藤義昭 松本悟士 大久保昌典	出光石油化学㈱ 出光石油化学㈱ 出光石油化学㈱ 出光石油化学㈱ 出光石油化学㈱			2	佐藤弘次 柳 秀一 首藤義人 東野俊一 植田祐治	NTT フォトニクス研究所 NTT フォトニクス研究所 NTT フォトニクス研究所 NTT フォトニクス研究所 ㈱日本製鋼所	光コネクタ用プラスチックフェ ルールの開発
		3	稲葉善治 石川 恬 伊藤 進 上口賢男	ファナック㈱ ファナック㈱ ファナック㈱ ファナック㈱			3	藤井淳司 船木 章 行本 徹 長尾知浩 久保昌宏	出光ユニテック㈱ 出光ユニテック㈱ 出光ユニテック㈱ 出光ユニテック㈱ 出光ユニテック㈱	鏡面ステンレスペルトを用いた 熱可塑性樹脂シートの製膜技術
第 6 回	1995	1	西田正三 恵本忠雄 寺岡淳男 上村孝志 数田邦和	㈱日本製鋼所 ㈱日本製鋼所 ㈱日本製鋼所 ㈱日本製鋼所 ㈱日本製鋼所	第 12 回	2001	1	尾上 勉 茅野 久 浅野圭吾 古橋正至 西村有城	㈱デンソー ㈱デンソー ㈱デンソー ㈱デンソー ㈱デンソー	インサート成形に防水シール性 を付与する加熱ピン抜き成形技 術
		2	森脇 毅 中島弘基 筒井健司 高橋健司 山崎 泉	岸本産業㈱ 岸本産業㈱ 岸本産業㈱ 岸本産業㈱ 岸本産業㈱			1	中野 亮 坂場克哉 澤田 聡 結城高志 須賀康雄	東レ㈱ 東レ㈱ 東レ㈱ 東レ㈱ 東レ㈱	3 次元射出成形 CAE システム の開発
		3	河本純一 松本琢也 大塚文夫 河野 巖 中森和伸	いすゞ自動車㈱ いすゞ自動車㈱ ㈱明治ゴム化成 東邦ポリマー工業㈱ 三菱化学㈱			1			

表 4 (b) 「青木固」技術賞受賞者一覧 (つづき)

回数	年度		受賞者	受賞者所属	受賞題目	回数	年度		受賞者	受賞者所属	受賞題目	
第 14 回	2003	2	八木和雄 善光洋文 橋本暁直	三井化学㈱ 三井化学㈱ 三井化学㈱	超高分子量ポリエチレンのイン フレーション成形技術	第 16 回	2005	1	田中義照 吉田正明	世紀㈱ 世紀㈱	熱硬化性高分子材料の射出成形における 完全ランナレス成形装置の開発	
		1	斎 聖一 小林伊智郎 駒月正人 佐々木英幸	㈱東亜電化 ㈱トーノ精密 ㈱本田技術研究所 岩手県工業技術センター	トリアジンチオール成形接着技 術を用いた電気二重層キャパシ タ用高気密ケースカバーの開発			2	株本 昭 伊藤正康 中山 清 岡田光範 吉田尚樹	古河電気工業㈱ 古河電気工業㈱ 古河電気工業㈱ 古河電気工業㈱ 古河電気工業㈱	超微細発泡 PET シートの開発 および光反射板への展開	
			2	井上公雄	㈱神戸製鋼所			新しい混練機構（VCMT）に よる 2 軸押出機の	3	並木恒久 小林 亮 木多正憲 倉島秀夫	東洋製罐グループ総合研究所 東洋製罐グループ総合研究所 東洋製罐㈱ 東洋製罐グループ総合研究所	高ガス遮断性二層ケイ素酸化膜 のプラズマ製膜技術
	3	池川直人 吉田浩之 佐藤正博 小林 充 東 啓二	松下電工㈱ 松下電工㈱ 松下電工㈱ 松下電工㈱ 松下電工㈱	1 回成形法による立体回路基板 の高密度回路形成技術の開発と 実用化	4			藤 和久 森脇健二 田中宣隆 北 和也 高瀬岳雄	マツダ㈱ マツダ㈱ マツダ㈱ ㈱サタケ 高瀬合成化学㈱	バンパからバンパへのリサイク ルのための塗膜除去技術		
		1	隅田憲武 福嶋容子	シャープ㈱ シャープ㈱	廃家電回収ポリプロピレンのマ テリアルリサイクル技術			第 17 回	2006	1	山崎正宏 荒川公平 宮城孝一 浅田 毅 赤谷晋一	日本ゼオン㈱ 日本ゼオン㈱ 日本ゼオン㈱ 日本ゼオン㈱ ㈱オプテス
	2	鈴木康平 佐竹喜悦 高谷浩志 高橋静男	山形カシオ㈱ 山形カシオ㈱ 山形カシオ㈱ 山形カシオ㈱	成形・金型モデル化工場にお ける高度デジタルネットワーク の先進的活用	2					木村将弘 高橋弘造 松井良輔 平岡俊彦 阿部晃一	東レ㈱ 東レ㈱ 東レ㈱ 東レ㈱ 東レ㈱	易成形・表面機能化二軸配向 PET フィルム
		3	小長谷重次 松本治男 阿部和洋 清水 茂 鶴沢正志	東洋紡績㈱ 東洋紡績㈱ 東洋紡績㈱ 三菱レイヨン㈱ 三菱レイヨン㈱	導電性高分子複合化技術の開 発とその応用							

結果、1999 年 2 月から正式にホームページを開設した。当初はプロバイダの URL のもとにあった本学会ホームページも、2003 年 4 月には独自ドメイン (jspp.or.jp) を取得して現在の姿になっている。2003 年 5 月からの総ヒット数 (トップページ) は 16 万件に迫っており、本学会のアクティビティを広く周知するためにも一役買っている。

当初はアナウンスを掲載することが中心であったホームページも、2001 年頃から年次大会・秋季大会の講演申し込み・参加申し込み等に使用されるようになり、会員との双方向の情報交換のツールになりつつある。また、2004 年初頭からは、創刊からの会誌「成形加工」の各号の目次と掲載された論文の英文概要が閲覧できるようになり、論文英文概要については全文検索が可能になった。世の中の流れは急速に電子化・ネットワーク化しており、もはやインターネット上に載っていない情報は無いに等しい状況になりつつある。今後もこの流れは続くであろうから、本会のホームページの役割もますます重要になってくよう。

7.3 地方支部

秋季大会の企画等を通じて地区ごとの「人の輪」ができるにつれて、本学会にも地方支部を設置したいとの気運が高まってきた。これを受けて、1999 年 3 月の理事会から本学会の地方支部通則の議論を開始し、同年 7 月に支部通則が発効された。早速、同年 9 月には関西地方の会員有志から関西支部設置提案書が理事会あて提出され、1999 年 11 月 24 日に関西支部設立総会を開催して活動を開始した。本学会にとって初めての地方支部設立であったこともあり、支部設立総会と本学会総会承認とが前後する混乱もあったが、2001 年 5 月の通常総会で関西支部設置が正式に承認され、現在に至っている。

本学会の地方支部通則の設定に際しては、国内を 8 つの地区に区分して支部を置くこととしたものの、すべての地区に一度に支部を発足させるのではなく、気運が高まった地区から順次支部を置くこととしたため、支部の地区割りには多少の「曖昧さ」を敢えて残してある。すなわち、支

部活動によるメリットをより多くの会員に享受してもらうため、隣接する地区に支部が設置されていない場合には、支部を設置する地区に隣接する都府県を含めても良いこととした。現在は、当初設立された関西地区以外に地方支部は設置されていないが、秋季大会企画等をきっかけとして、この「隣接都府県規定」を適用しなくて済むよう、全国に地方支部が設置されることを期待したい。

7.4 事務所と事務局長

最後に、学会運営の本拠である事務所と事務局長について振り返る。本学会の事務所は、創立当初、日本合成樹脂技術協会のご支援により、同協会内 (東京都中央区銀座) に設置された。事務局長も同協会の熊田和雄氏が代行された。その後、学会の発展に後押しされ、また将来の社団法人化に要する条件 (独立事務所と専従職員) を見据えて、1991 年 8 月には港区芝浦に事務所を移転するとともに、川端 豊氏を事務局長として迎え入れ、非常勤職員の飯田さんとともに、現在の事務局体制の基礎ができあがった。その後、固定費 (事務所借料) の圧縮と交通の利便性、編集作業の円滑化を目的として、事務所を渋谷区桜丘町に移転した。さらには、1998 年 6 月に事務局長が川端氏から印南英敏氏に引き継がれた。

学会活動の活発化に伴い事務所の狭隘さが問題となってきたこと、「公益法人の設立許可及び指導監督基準」で法人の内部留保 (繰越金) を年度総経費の 30% 以内とすることが強く求められたこと、さらには当時の事務所の貸借契約更新時期とが重なって、2000 年 12 月の理事会で、自前の事務所の所有を検討するという「大英断」が下された。早速、印南事務局長を中心に適切な物件を探索するとともに、経費上の得失を十分に議論し、2001 年 4 月の理事会で事務所用物件購入の方針を承認した。2001 年度の通常総会の承認ならびに文部科学省の了承を待って、2001 年 8 月から現在の事務所 (品川区大崎) で業務を開始した。日本の諸学会を見回しても会員数 1500 名規模の学会が自前の事務所を所有することはきわめて稀であるが、本学会は

表5 理事会構成の変遷

期	年度	役員 (所属は当時)
1	1988-1989	会 長 山口章三郎 (工学院大) 副会長 (庶務担当) 中川威雄 (東大) 副会長 (企画担当) 船津和守 (九大) 副会長 (編集担当) 成澤郁夫 (山形大) 理 事 14 名 監 事 2 名
2	1990-1991	会 長 大柳 康 (工学院大) 副会長 (庶務担当) 酒井忠基 (日本製鋼所) 副会長 (企画担当) 船津和守 (九大) 副会長 (編集担当) 成澤郁夫 (山形大) 理 事 24 名 監 事 2 名
3	1992-1993	会 長 中川威雄 (東大) 副会長 (庶務担当) 酒井忠基 (日本製鋼所) 副会長 (企画担当) 大谷寛治 (ITB) 副会長 (編集担当) 前川善一郎 (京都工繊大) 理 事 26 名 監 事 2 名
4	1994-1995	会 長 成澤郁夫 (山形大) 副会長 (庶務担当) 西脇信彦 (東京農工大) 副会長 (企画担当) 大石不二夫 (神奈川大) 副会長 (編集担当) 黒崎晏夫 (東工大) 副会長 (財務担当) 竹内一良 (トヨタ自動車) 理 事 15 名 監 事 2 名
5	1996-1997	会 長 船津和守 (九大) 副会長 (庶務担当) 西尾太一 (住友化学) 副会長 (企画担当) 小山清人 (山形大) 副会長 (編集担当) 伊澤横一 (旭化成) 副会長 (財務担当) 高山和利 (日精樹脂工業) 理 事 15 名 監 事 2 名
6	1998-1999	会 長 酒井忠基 (日本製鋼所) 副会長 (庶務担当) 横井秀俊 (東大) 副会長 (企画担当) 金井俊孝 (出光石油化学) 副会長 (編集担当) 加藤和典 (東工大) 副会長 (財務担当) 篠田勝郎 (積水化学工業) 理 事 15 名 監 事 2 名
7	2000-2001	会 長 黒崎晏夫 (東工大) 副会長 (庶務担当) 鞠谷雄士 (東工大) 副会長 (企画担当) 濱田泰以 (京都工繊大) 副会長 (編集担当) 竹村憲二 (メディックス昭和) 副会長 (財務担当) 末松征比古 (三井化学) 理 事 15 名 監 事 3 名
8	2002-2003	会 長 西脇信彦 (東京農工大) 副会長 (庶務担当) 佐藤 勲 (東工大) 副会長 (企画担当) 馬場文明 (三菱電機) 副会長 (編集担当) 生川 洋 (クラレ) 副会長 (財務担当) 岡田常義 (ポリプラスチックス) 理 事 15 名 監 事 3 名
9	2004-2005	会 長 末松征比古 (三井化学) 副会長 (庶務担当) 佐藤 勲 (東工大) 副会長 (企画担当) 西村寛之 (大阪ガス) 副会長 (編集担当) 鞠谷雄士 (東工大) 副会長 (財務担当) 小瀬古久秋 (リコー) 理 事 15 名 監 事 3 名
10	2006-2007	会 長 小山清人 (山形大) 副会長 (庶務担当) 扇澤敏明 (東工大) 副会長 (企画担当) 西村寛之 (大阪ガス) 副会長 (編集担当) 大嶋正裕 (京大) 副会長 (財務担当) 原 保信 (トヨタ紡織) 理 事 15 名 監 事 3 名

会員各位の強力なサポートと堅実な運営に恵まれてこうした英断が行い得たものである。この事務所は業務を行うことは当然、年々増え続ける証票類や会誌・予稿集のバックナンバーの収納にも十分な面積を有するだけでなく、理事会をはじめとする多くの委員会を開催することができることから、会務の円滑化と必要経費の圧縮に大いに貢献している。

2006年3月には、学会事務局の激動期を牽引してきた印南事務局長が退任され、同年4月からは後任として久保田和久氏が着任され現在に至っている。事務局運営をサポートする非常勤職員は、現在の事務局体制構築以来、印南事務局長（当時）が体調を崩された2002年からの1年強を除いて一人体制を続けてきたが、処理すべき事務量の増大に応えるべく、2008年度から二人体制とすることが検討されている。

8. おわりに

以上、本学会の20年間の歩みを特に最近の10年の運営サイドのトピックスに注目して振り返ってみた。これらを一覧いただいておわりの通り、本学会は、我国の経済情勢が大きく変化しつつあるなか、きわめて順調に発展を続けてきた。これは会員の熱意が創立以来ずっと続いているため、言い替えると会員一人一人がこの学会から有益なものを得、それに応えて学会を支援してきたためであろう。こうした良い意味での「Give and Take」が成立する文化は学会が過度に「成熟」すると薄れてくる傾向にある。その意味では、本学会はまだ「若い」が故にこうした発展ができるのかもしれない。しかし、ここ何年かの学会の活動を運営面から見させていただいてきた限りでは、この「若さ」あるいは「熱さ」はしばらくなくなりそうもないように感じる。

この次のディケードにも様々な変化が起こるだろう。当面想定されている変化には、学会等の学術団体の新公益法人化に対する対応がある。新公益法人をめぐる状況にはまだ不透明な部分が残されているが、本学会はその「若さ」、**「熱さ」**を原動力に、必ずや適切に対応され、創立30周年記念誌にも**「新公益法人化」**とともに**「順調に発展」**の文字が並ぶことになると信じる。

参 考 文 献

- 1) 横井秀俊：学会が歩んできた10年一昔、成形加工，11(4)，379 (1999)